

KOZMOS

巻頭言	1
私のすすめる一冊の本	2
朝霞分館より	7
工学部分館より	7
整理進む“龍山文庫”	7
館内だより	8
雑学事始	8
編集後記	8

1982 春 (No. 57)

巻頭言

新入生諸君と図書館

朝霞分館長 松 岡 八 郎

まず新入生諸君に入学おめでとうを申し上げねばならない。いよいよ諸君は、本学の学生として大学生生活にはいったのであるが、一体どのように大学生生活を送ろうと考えているのであろうか。諸君にはそれぞれに入学の目的や動機があり、それにもとづいていろいろと考え、同時に希望に燃えた生活を送ろうと考えているのではないかと思われる。またすでに、学長先生を始め各学部長その他の諸先生から種々な指導を受けていることであろうから、これから述べることは、諸君にとってあるいは蛇足かも知れないが、いま一つの考えとして受取って欲しい。

それは、これからの大学生生活の中心にぜひ図書館を置いて欲しいと思うのである。今更言うまでもないことであるが、大学における図書館は、その大学のシンボルであり、また実質的にはその大学の知識ないし情報のセンターであり、集積所である。本学の図書館は白山校舎に本館があり、朝霞校舎と工学部校舎にそれぞれ分館があって、その図書の総数はすでに五〇万冊を越え、わが国の大学図書館のうちでも有数の蔵書数を誇っている。そこでこの図書館を諸君が大学生生活のなかで大いに活用しない手はないと確信するものであ

る。

勿論、諸君の大学生生活のすべてを図書館とともにすべしというのではない。大学生生活には講義への出席を始めとして、ゼミ、サークル、スポーツ、趣味、レジャー、アルバイト、その他、様々なものを含んでいることは言うまでもない。だが大学生の大学生たるのゆえんは、なんと言っても知識への欲求であり、したがって、この知識を追究するためには、図書館が大きな役割を果たすことになるのであり、この意味において、諸君の大学生生活の中心に図書館を置くべきであると考え

次に、本を読む態度・心構えについて一言いっておきたい。読書の醍醐味は、おのれを忘れて、その書物に没入することであろうが、だがそのとき注意して欲しいことは、どのような場合にも批判的精神を忘れてはならないということである。この批判的精神こそ、知識への欲求をみざす大学生たるべきものの読書法ではないかと思う。

以上、ごく当然のことを述べてきたにすぎないが、諸君のこれからの大学生生活に少しでも役に立つことができるならば、望外の喜びである。

私のすすめる一冊の本

(注；文末の記号は各館の請求記号です)

土屋 祝 郎 著

『紅 萌 ゆ る』

(岩波書店)

元経済学部教授 市川 弘 勝

この「コスモス」が発行されるころには、私は本学を定年退職しておりますが、大学を去るにあたって一冊の本を学生諸君にお薦めしておきます。

私が旧制高校から大学生活を送ったのは、1929年(昭和4)から36年(昭和11)の時期でしたが、当時は一方において大正デモクラシーの花が開いたとともに、他方においてファシズムの暗い足音がヒタヒタ聞えてくる時代でもありました。私たち学生の多くが「第2貧乏物語」を読み、「奉天30年」や「ミケランジェロ」が若い人たちの間で好評でした。

あれからかれこれ50年。当時の学生の考え方や行動を追想して、「昭和初年の青春」と副題のついた『紅萌ゆる』(1978年、岩波書店)が出版されました。この本は、『…三高に関する記録ではあるけれども、三高に限ったものではなくて、旧制の高校生ならばどこでも、また誰でも共感していただけるものと信ずる。なぜならば当時の高校生は、日本の国が成り上がりの帝国主義から急速に軍国主義に落ちこんでゆく間の、ほんのわずかの期間の自由主義に浴しながら、たちまちファシズムに転化してゆく急旋回点を共通に生きてきたからである』と著者も「あとがき」でいっているように、50年前の若い学徒たちの共通した生き方を思い起こさせるものです。

私がこの本をお薦めするのは、もちろん、50年前の学生の行動を真似しろというのでもないし、年寄りのノスタルジアからでもありません。いま、世界のいたるところで軍拡のキナ臭い匂いが立ちこめてきたし、衣(ころも)の下から鎧(よろい)をチラつかせていた日本の支配者も、いま衣を半分脱ぎかけてきたような現在、ファシズムの

足音を敏感に感じとった50年前の若き学徒の生き方を思い起すことは、決して無意味ではないと思うからです。

「なんとなくクリスタル」も結構ですが、時代をハッキリ見つめて懸命に生きていこうとする学生諸君に、あえてこの本をお薦めするしだいです。

(白) 363.021 : T S—2 (岩波新書黄版, 47)

(朝) I S 黄 : 47

(工) A081.6 : I—3 : 2—47

斎藤 美 津 子 著

話しことばの科学, コミュニケーションの理論

(サイマル出版会, 1968. 183p.)

社会学部教授 井 出 翁

私たちの回りを見ると一人一人の顔付きが違って見える。それぞれの人が独自の顔を持っているのである。それと同じようにそれぞれの人は、固有な物の考え方、意見、行動の仕方を持っている。それぞれ独特の存在であることが普通であり、正常の状態である。

もし多数の人々が一つの刺激に対して、それぞれ固有の反応を示さずに画一的な反応を示すならば、何か異常なものを感じるであろう。

対話、話し合いというのは、西欧において異質なものを、対立し合うもの間のコミュニケーションの手段としてある。話し合いを仲のよいもの同志間に限ったり、単に相手と仲よくなるための手段としては使っていない。対立するものの中に同質のものを、仲間の中に異質なものを発見する手段が話し合いである。対話を通じて対立するもの、異質なものの中から普遍性、一般性を求めている。話し合いでは、相互に自己の意見を十分に表現し、話す事柄の一つ一つを相手に納得させ、相互に確認し合わなければ、話しを前に進めることはできない。そのためには相手の言うことをよ

く聴き、よく理解しなければならない。

この本の著者は、正しいコミュニケーションとは、きき手が話し手と同等の重みを持ち、また自己を表現する話し方はきき方から始まると言っている。そして民主社会は、正しいコミュニケーションを基礎としているという立場から本書を書いているが、コミュニケーションの終極の目的は、人間と人間の出会いをもたらしものでなくてはならないと言っている。それぞれの人は、この世界にたった一つしかない貴重な存在であるから自分自身を大切にしなければならないと同時に、自分自身と同じように他の人の存在を大切に、素直にそれを認め、そこを出発点にして人間社会の発展が始まることを示唆している。

(白) 809 : FM

(朝) なし

(工) 809 : SM

D. J. ブーアスティン著 星野郁美 後藤和彦 訳

幻影の時代

(東京創元社)

ホテル観光学科講師 松園俊志

初版が昭和39年10月であるから、約17年の時間が経過したことになる。当時60年安保後の騒然とした世情であった。東京オリンピックを目指し、名神高速道路や、新幹線が開通し、都内はホテル建築のラッシュであった。

私がこの本を読んだのは、それから2年ぐらい経ってからだと思われる。偶然に書店で手にし、目次を見て驚いた。“旅行者から観光客へ”という一章があるではないか。創元社の現代社会科学叢書は、社会学系統の本が多く、私の専門分野からは、目にするチャンスは少なかった筈である。旅行や宿泊を歴史的な視点から解明した本は当時なく、非常に勉強になった。日本は、まだ旅行が大衆のものになる以前であり、米国の大衆文化の進歩ぶりに驚愕した。当時、ブーアスティンの「本当の出来事よりも疑似イベントを、現実よりも非現実を、実体よりも幻影を愛好する」という考え方には、納得出来ない点も多小あった。し

かし、現在の我国を見ると、“疑似イベント”だらけである。米国化が、進んだばかりではない筈である。20世紀初頭までは、国内・外を問わず、旅行は不便で費用のかかるものであった。鉄道や航空機等の大量輸送機関開発に伴い、移動に関しての危険はなくなり、安全で効率よく旅行できる様になった。欧米より休暇が少ない日本では、時間的により圧縮された旅行形態にならざるをえない。本来は稀にしか見る事の出来ない、儀式や祭りですら、アトラクションとして行なわれる様になり、カメラの被写体としての存在になる。旅行のもつ冒険性や、ロマンを追うと、時間的にも、経済的にも手のとどかないものとなる。日本も遅れはしたが、同じ道を歩んでいる。その意味でこの本は、予言にみちた文明批評とみる事が出来る。旅行に関するものは、この本の一部であり、マス・メディアや広告についても、一貫して“疑似イベント”化されているとの警句を述べている。今でも読み返すと、目を洗われる気持になる。

(白) 361.54 : BD

(朝) 361.54 : BD

(工) なし

鈴木竹雄・竹内昭夫 共著

会社法

(有斐閣 1981)

法学部助教授 盛岡一夫

法律学全集(有斐閣)の第28巻として鈴木・竹内共著の会社法が刊行されることを聞いたのは6、7年前であったので一日も早く発行されることを待ち望んでいたが、昭和56年7月に発行されたので、本書を私のすすめる1冊の本としたい。その理由としては、両教授ともに商法学界を代表される学者であり、また、私が学生時代に会社法の基本書として鈴木教授の会社法で勉強したこと、その後、商法を担当するようになってからは、研究を進めるうえで、竹内教授の発表された論文、判例批評等から最も深い影響を受けて講義をしているからである。

本書は鈴木教授の会社法を土台として、松岡誠

之助、前田庸、田村諄之輔の三教授が第1次原稿を書かれ、それを竹内教授が加筆され、徹底的な討議を重ねる方針をとられたようである。したがって、解釈論上の問題点について学説・判例を引用し、鋭く指摘した最高水準の理論を展開するとともに、今回の改正法についての理論にも役立つようにできている。昭和56年6月3日「商法等の一部を改正する法律」が参議院で可決され、成立し、原則として同57年10月1日より施行されることとなった。本書は今回の改正試案および法律案要綱と改正法との比較説明をし、さらに新旧条文の対照表を載せているので、どの点がどのような理由で試案にとりあげられ、それがどのような理由で要綱、さらに法案になっていったかという改正経緯の跡づけをするにも役立つであろう。

(白) 320.8 : H : 2—28

(朝) 320.8 : H : 1—28

(工) なし

加藤周一著

羊の歌

(岩波新書)

経営学部教授 齋藤弘行

本書は現在あらゆる分野で評論活動をしている著名な人物の回顧録である。といっても歴史の教科書のような出来事についてまんべんなく、きちんと並べるのではない。(ここでとりあげたのは特にその上巻である。)大正の中頃から東京の風景のなかにひとりのあまりかわいらしくないが、成績が頗る良い少年が育って行く。小学校は5年で中学に入学し、高等学校から大学の医学部へ進む。初めは友人のない子であったが、次第に多くの才能ある知己を得る。高等学校の寄宿寮で、また浅間の高原で思索が続く。とくに医学部で勉学する傍ら仏文科の教室に出入りし、文学に接すると共に、将来の活動への布石が出来上がる。専門家になるのではなくて専門領域を超えた領域に入りこむ状況が知られて、その秘密が明らかになる。

我々の興味をそそるのは、ある1人の聡明な少年がいかにして現在の代表的な知識人に育って行ったかの過程である。それはとり立てて著者の大

冒険を伝えるのでもないし、特殊な人生体験を知らせるものでもない。作者は幼年期からかなり醒めた目で物を見る習慣がついている。無闇に感動したり、感情をあるがままにほとぼしらせたりはしない。戦時下の事情の成行もきちんと眺めるだけの力量がある。しかし決してヒューマニティがないのではなく、戦争で多くの人が死ぬことに怒り興奮する。そのことが先ず事実として自己にかかわっていて、別に理由があるわけではないのだというところに、人道主義と評論性の不思議なミックスがある。

各々の体験は異なるのは当たり前であるが、もしもこれまでの学生生活経験のもの足りなさにもどかしく感じたとすれば原因がどこにあるかをこの作品は教えてくれる。よく大器晩成というが、それは一種の負け惜しみに過ぎないと次第に分ってくる。時代がそうしたとか、才能がそうしたとかの議論よりも、先ず、人は知的に早く熟することが必要ではないだろうか。今からでも遅くない年齢の人に、本書は方向を示唆してくれるであろう。

(白) 304 : K S—3 (岩波新書, 689)

(朝) I S 青 : 689

(工) A304 : K S—3 : 1□

大野林火監修

入門歳時記

(角川書店)

工学部教授 田畑稔雄

歳時記といえは俳句をつくる時必要なもので、大変大部のものもありいはゞ座右の書の様なものですが、俳句とは全く無関係に読み物としても真に面白いものです。特にこの本は入門書ですので難しい事は何もなく、さらさらと読み下して後に極めて爽やかな思いが残ります。

私もふとこの本を書店でみつけ何回も何回も読みました。殊に大きさも手頃ですので通学の電車の中でよく読みますが、電車の中の混雑も忘れずし、いらいらした気持も自然に消えて行きます。

特に川越校舎は雑木林に恵まれていて、秋の紅

葉に、初冬の落葉に、そして春の芽吹きに色々と思い出す事が多くなったり、木の下草の名前も知らない雑草に意外な力強さを発見したりして、今迄何も考えなかった事に沢山のイメージが浮ぶ様になります。全く不思議です。

希望を持って大学に学ぶ学生諸君に一読をすすめます。特に辛い時、苦しい時に適当な所を読むと、季節を考えたり故郷を思い出したりして心が平静になり勇気がでて来ます。

(白) なし

(朝) なし

(工) 911.3 : OM

渡 辺 清 著

私 の 天 皇 観

(勁草書房)

文学部教授 田 中 陽 兒

一人の人間が、青春の一時期に、決定的な裏切りに出会い、それからその巨大な相手と対峙しつづけ、折々に発した精神の火花の軌跡を描き尽くそうとしたならば、それは、一見したところ、怨念の所産に似た相貌を呈するほかない。

渡辺清にとっての天皇とは、そうした相手であり、存在であった。

著者の渡辺氏は、昭和16年(1941)の春、志願して海軍の水兵となり(海兵団経由)、同年12月8日の対米英開戦とともに、16歳で艦隊勤務につき、敗戦までの4年間を、文字通りの皇国少年として、最前線で戦い抜いた。この間、戦艦武蔵の撃沈でレイテ沖の海中にほうり出され、奇蹟の生還を遂げたこともあった。

その彼が、敗戦の祖国にようやく帰りついた4日目のこと、古新聞の束の中から、当然自決するものと思っていた天皇がマッカーサーとならんで写っている大きな写真をみつける。この時の強烈なショックから、彼のいう長い長い「復員休暇」が始まる。それは、昨1981年7月23日、病にたおれて近くまでの37年間つづき、その間彼は、おのれにとっての天皇の意味を問いつづけてやまなかった。その自問自答の歩みを折にふれて記録し、重い手ごたえのある一冊の本に凝縮させたのが本

書である。7月付の著者あとがきが最後にのっているが、初版発行の8月15日には、彼はもうこの世にいなかった。

本書のなかには、天皇断罪の客観的根拠の明示にとどまらず、そうした存在に無抵抗であったおのれ自身に対するはげしい怒りと自責の念があふれており、時には、相手方への憐憫の情さえただよっている。学問的な表現形式をとっていないだけに、読み手の心の深さがためされる面があり、出身がまったく異なるのに、小野田寛郎、横井庄一両氏よりはむしろ、戦艦大和の吉田満氏に近いところに、渡辺氏がいることを感ずるのである。少なくともここには、おのれの生き方を、「恥多き生き残りの宿業」と観ずる戦中派の良心の核心部がある。とくに若い方々に読んでもらいたいのには、人から人への想いの継承なくしてはまともな心の熟成はあり得ないと思うからである。

(白) 312.1 : WK-2

(朝) なし

(工) なし

ハマーショルド著・鶴飼信成訳

道 し る べ

(みすず書房 昭和42年)

工学部講師 田 中 秀 人

古今東西万巻の書から一冊を選べとは、これはまた難問である。英語の一教師としてはせめて英和大辞典の一冊位は机上に置いていただきたいし、西洋の文学・思想等を志す人には『聖書』の一読を求めねばならない(幸い、カトリック、プロテスタントの共同訳が講談社学術文庫に入り、バルバロ訳も同社より新書判分冊の形で出版され、通勤・通学時に気軽に読めるようになった)。また、具体的に文学作品など持ち出そうものなら、あれもこれもときりがない。前置きが長くなってしまった。

ここでは、筆者が深い感銘を受けた『道しるべ』という本をご紹介したい。著者のダグ・ハマーショルドは1953年から1961年まで国連事務総長を務めたスウェーデンの第一級の外交官・政治家であり、本書は彼が二十歳の時からその不慮の事

故死の直前まで書き綴ったところの日記である。

本書は人一倍公務に励みながら、同時に誰よりも充実した内面生活を送った一個の卓越した精神の軌跡である。生きることの意味、死、孤独、神、信仰、人間のもつ弱さ、強さ、美しさ、そして醜さ。それらについてハマーショルドの思索は飽くことなく重ねられた。その魂の内奥の激しい葛藤も卒直に語られている。

本書のかなりの部分は詩として書かれているが、ここにみられる自然詩は、この勝れた人物を生み出した清澄かつ厳格な北欧の自然がいかにも人を宗教的、瞑想的境地へと至らせるかを明示している。この北欧の自然はまさしくいま一人のスウェーデン人、イングマル・ペルイマンのものでもある。本書を読みながら、今世紀を代表するこの映像作家の世界を想起したのは筆者一人ではあるまい。

キリスト教神秘主義の線上にあるハマーショルドの宗教的、思想的世界に、現代の混迷を脱する一つの道がある。最後に、以上のような生きる指針、思索の道しるべとしての読み方以外にも、本書が詩として文学的鑑賞に十分耐え得る美しい作品であることを銘記しておかねばなるまい。

(白) なし

(朝) なし

(工) 949.85 : HD

沢田昭夫著

論文の書き方

(講談社 学術文庫)

朝霞分館 鹿島仁郎

近年、類書が多く出版されているが、著者は、その序文で、本書と類書のちがいについて『『論文の書き方』という同名の本には有名な清水幾太郎氏のものがありますが、これはどちらかという和高尚な理論書です。それに対して本書は、もっと低俗な実用中心のハウ・トゥーもの……以下略』であるとしている。低俗であるか否かはともかくとして、著者の言うように第一章、問題の場からトピックへ、第二章、資料探し(図書館のつかい方)第三章、研究の準備、第四章、資料研究・読

みと整理といった場合に、論文をまとめ上げるまでの研究過程を順序を追って、著者の体験にもとづいて解説している。

本書は対象読者層を大学生、一般の実務者にかぎらず、大学院生、学者など専門的に研究活動を行なう人をも含めているので各章各節の説明は詳細である。一つ一つ丁寧にかつ具体的に解説しているところが実用書たる所以である。第二章、資料の探し方では、図書館のつかい方にスペースのすべてをさいている。出版社や書店の出版目録、カタログ、新聞広告、或いは開架式図書館の書棚を本屋で探す要領で直接当る探し方を素人のやり方といましめる。件名(主題)目録、著者・書名目録などカード目録の解説と活用法を、本格的、独創的論文に取りくむ場合は図書館の目録カードに当る前にレファレンスルームにある書誌および書誌の書誌の利用をすすめる。新しい研究論文に関する情報は出版年鑑や、雑誌記事索引の類から得られることが述べられる。次章では非書誌的参考図書の利用にもおよぶ。合せて和洋の主要な書誌の紹介もされており参考になるはずである。これらはほんの一例にすぎない。

要するに第二、第三章で図書館の利用法の概要がわかるように構成されている。当然、文献カードや研究カードの作成など論文を書くのに必要な諸々の作業についても具体的でわかりやすい。しかし、各章共に具体的かつ詳細な解説が含まれるので初心者には一冊全部理解するのは負担であるかもしれない。そのためか第九章では、小論文の書き方にふれ、その部分だけ読んでも数枚のレポート程度なら役立つような工夫もみられる。

著者の「文例を上げた文体論的、文章論的なものと参考文献目録を付したでき上がった論文の姿を示すもの」と区別しようとした本書の目的はみごとにはたされている。座右に置いてレポート、論文の作成の際、事前に或いは途中ででも熟読することをすすめる。なにか得るものがあるはずである。

(白) 816 : S A-2 (講談社学術文庫)

(朝) GB : 153

(工) なし

朝霞分館より

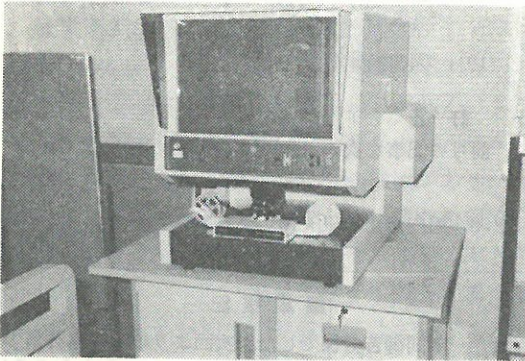
マイクロ・リーダープリンター導入

朝霞分館では新しくリーダープリンターを購入しました。(写真) この機種はミノルタR P407 Eで、電子写真方式による卓上型汎用リーダープリンターです。使用できるフィルムは、35mmロールフィルムおよびフィッシュフィルムです。複写用紙のサイズはA3・A4、B3・B4ですが、当面A3を使用する予定です。

当館で所蔵するマイクロ資料は毎日新聞(創刊号から)大正昭和期経済統計資料、Economic Surveyなどまだ少ないのですが、今後書庫のスペースの関係からもマイクロ資料が増えることは確実です。また、個人でフィルムを入手することもあるとおもいます。大いに利用してください。

なお、利用法についてはきまり次第お知らせいたします。

(河田 茂記)



工学部分館より

ロッキード DIALOG システムの デモンストレーション行なわれる

去る12月3日(木) 工学部分館では、丸善KK・MASISセンターのお世話で、ロッキードDIALOGの実演が行なわれた。教員学生が25名以上集まり、狭い会場は満杯となった。

前半は説明、後半は実施であったが、熱心な方々は遅くまで残って、端末機の操作に熱中した。

これは電話回線を使って、アメリカ・ロッキード社の作成した膨大な情報(データ・ベース)を

コンピュータで検索するシステムである。自分の研究しているテーマ、興味あるテーマ等について、世界中でどんな論文があるかを、すぐに検索することができる。このシステムは、巨大なデータ・ベースを作りあげた地道な努力と、それらを自由に検索するコンピュータ、そして世界中に張りめぐらされた電話回線とが、協力して造りあげた、現代のピラミットとも言えるかも知れない。

特に情報検索のスピード化と網羅性とを必要とする工学分野では、これは是非とも見逃がせないものである。また、情報の収集・整理・利用を仕事とする図書館員としても、このシステムは見逃がすことのできないものである。

それにしても、かくも膨大なデータ・ベースを作りあげた、アメリカ人の組織力には、敬意をあらわす次第である。日本でも、日本国内の情報を世界に提供できるような組織作りが、未来の課題となるであろう。

(中村準一記)

+++++

整理が進む“龍山文庫”

龍山文庫は本学の名誉教授故龍山義亮氏(教育学)の旧蔵書である。昭和54年7月ご遺族の好意によって本学図書館がその蔵書の全てについて寄贈を受けたものである。蔵書のほとんどは教育学に関する図書で今日ではすでに入手することの困難な教育学史上重要な内外の基本文献が数多く含まれている。数量的には和漢書1190冊、洋書1053冊、その他雑誌、パンフレット等の小冊子を含めると総数約3000冊に達する。この文庫の受入れにより教育学関係の基本文献の充実はもとにより斯界にとってもきわめて有益である。図書館としては出来るだけ早く整理をおこない全貌を公表し利用に供することが義務であると考え、56年度の整理スケジュールにのせ、56年11月末日現在、和漢書893冊、洋書589冊、並びに雑誌24種(271冊)の整理を完了した。これらの図書についての利用は目録コーナーに龍山文庫としてカード目録が別置され、閲覧が可能である。

なお、残された未整理図書については今後の整理スケジュールにのせる予定である。(小島浩記)



雑学事始

珈琲の漢字の由来

「珈」は女性の髪にさす珠玉飾り、「琲」はそれを貫くひもの語源をもつ二字を当てたもので、枝に密生するコーヒー果実の情景を端的に描写してい

る。奥山儀八郎の調査によると、蘭学者宇田川榕庵自筆の『蘭和对訳辞書』にこの文字が初めて使われたという。(コーヒー小辞典より)

その他コーヒーと読ませる字には、加非・加非・茄非・茄非・架非・架啡・啖啡茶・骨喜・骨非・滑比・滑非・可非・可喜・哥喜・唐茶・煎豆湯・雁喰豆・哥非乙があります。(宛字外来語辞典より)

館内だより ('81.10/1-'82.1/19)

- 10月1日 法政大学図書館(機械化)見学, 山内, 池田, 島田, 栗沢
- 5日 書誌作成分科会, 於東京女子大学, 小笠原参加
- 6日~9日 私立大学連盟研修, 村山参加
- 13日 丸善UTLASオリエンテーション, 直井参加
- 14日 OA講習会, 於狭山市民会館, 藤野参加
- 15日 文教大学図書館披露, 小島出席
- 21日 分類分科会, 於独協大学図書館, 日野, 直井参加
- 理工学分科会, 於明治大学生田校舎, 伊藤(美)参加
- 26日 工学部分館運営委員会
- 28日 図書館運営委員会, 図書館連絡会
- 29日 全国図書館大会, 於浦和市, 小島, 鹿島, 島村参加
- 11月6日 私立大学図書館協会東地区研究部会, 於主婦の友会館, 千葉参加
- 10日~13日 大学図書館職員講習会, 於東京大学, 小笠原参加
- 18日 分類分科会, 日野, 直井参加・理工学分科会 伊藤(美)参加, 於成蹊大学
- 27日 視聴覚室主催, 映写会(奇跡の人)
- 逐次刊行物分科会, 於東京家政大学図書館, 村山, 島村参加
- 12月11日 工学部連絡会
- 14日 書誌作成分科会, 於早稲田大学, 小笠原参加
- 15日 図書館連絡会
- 16日~19日 九州大学, 西南学院大学, 九州産業大学, 京都産業大学, 関西大学各図書館(機械

化) 見学, 山内, 村山, 井田

16日 分類分科会, 於創価大学図書館, 日野, 直井参加

24日 コンピュータ導入に伴う研修会(三館合同) 於白山本館第三閲覧室, 講師, 工学部助教授 青柳宣生氏, 電子計算機センター業務室長, 三浦久子氏, 同室員, 遠藤武氏, 社会学部教授 井出翁氏

1月12日 相互協力分科会, 於雨水会館, 村田参加

14日 書誌作成分科会, 於東京家政学院大学, 小笠原参加

19日 図書館連絡会

訂正

前号の記事を次のように訂正いたします。

誤 正

P.8 館内だより 6.10 小笠原富子 → 柴 富子

一編集後記一

- ★ 一年間御苦勞様でした。次回よりの新編集委員の方に御期待下さい。(S.K.)
- ★ “機械化導入”について、今回は「さわり」の部分として“特集”を試みましたが、今後の具体的実践上の問題については、新しい角度から企画されますよう次期編集委員に期待します。(T.I.)
- ★ 図書館資料の中での視聴覚資料も大部増加しました。これらの資料も以後取り上げていく予定です。(Y.M.)
- ★ 雑学だけでなく“学問の情熱”も大切に。(T.K.)
- ★ 今春インフルエンザが大暴れ、次号御期待!!(N.H.)
- ★ コスモスがこれからも多くの人に読まれますように。(A.N.)